

## 米国船マンハタン号の渡来記録

写真は、市内に伝来したアメリカ船の絵巻の一部です。マンハタン号という捕鯨船で、弘化二(一八四五)年二月に日本人漂流民二十二名を乗せて房総沖へ姿を現しました。

この絵巻には、異人や異国船、漂流地域、日本の警備役人たちの旗印などの絵のほか、日本人たちが漂流した事情をはじめ、東京湾へ進入するマンハタン号のことを浦賀番所へ知らせに走る漂流民の代表者の動きや警備役人たちの対応など、浦賀番所で役人が事情聴取した内容が記録されています。

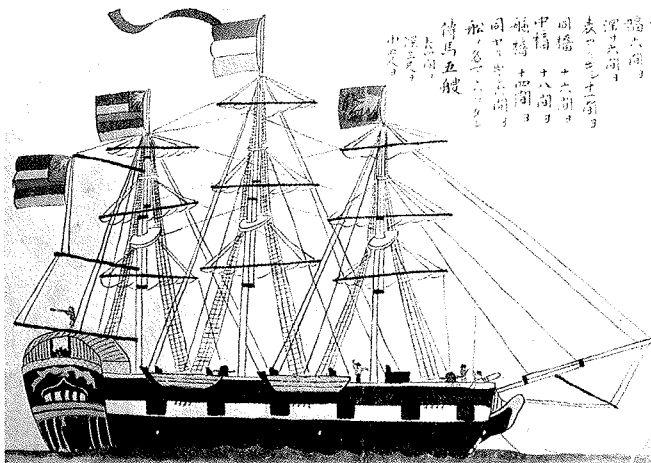
この事件に関しては、いくつかの記録が残されていますが、この渡来記録をまとめたのは、浦賀に詰めていた下田廻船方(浦賀奉行所支配の下田にあった浦方御用所の役人)の白井正蔵という人物です。翌年の米軍艦の来航の際も記録を残した人物で、弘化二年の五月になってこの事件に対応した役人の目線であらましをまとめたものです。

前年暮に徳島を出航した十一人乗

りの船が紀伊半島沖で難破、小笠原諸島の鳥島へ漂着していたところ、約四十日後にマンハタン号に救助されます。日本へ向う途中で四日間漂流していた十一人乗りの別の船も救助して、江戸を目指しました。ところが房総半島へ近づくと狼煙が上つて陸上での緊迫感が船に伝わると、漂流した日本人が乗っていることを浦賀番所へ報告するため、二人の漂流日本人が守谷

村(勝浦市)へ上陸します。同じ日の夕方にも朝夷地域で二人が上陸して、それぞれ地元役人や忍藩役人に付添われて、浦賀奉行所へ出頭しました。

奉行所では警備担当藩に連絡して、陣屋や台場の警備を固め、警戒のために船



米国船マンハタン号

を出しますが、二月下旬に異国船は北方のカムチャッカまで流され、再度東京湾口へ姿を現したのは三月十日。そのときは一日間館山湾の高之島へ船掛りしています。その後多くの漁船に曳航されて浦賀へ入り、浦賀奉行の尽力で漂流民たちは幕府の方針通り長崎へ廻されることなく浦賀で下船。日本に戻ることが出来ました。マンハタン号は水や食料・燃料を与えられて帰帆したのです。

この事件があった年に生れた六軒町(館山市北条)の高山恒三郎は、親からマンハタン号が館山湾に入港した際の話聞かされていきます。館山湾に入った船に小舟で近付いた人たちがいて、パンと酒を貰って帰ってきたものの、毒を心配して捨ててしまったとか、マンハタン号は幕府から鶏と大根を貰って帰ったなどの話が残されています。不安より興味のほうが強かったようです。

# 幕末の東京湾警備

2月2日(土)～3月17日(日)

## 江戸防衛の役割を担った 房総半島南部を考える

幕末の東京湾に頻繁に侵入してきた異国船。鎖国の方針である幕府は海岸の警備を強化し、江戸を守る房総半島や三浦半島には多くの砲台が築かれました。警備を担当する大名たちは担当地域を所領や預り地として支配することになり、その拠点となる支配と警備のための陣屋を設置していきます。安房にも陣屋が設けられ、要所に置かれた砲台や遠見番所にも奥州白河藩・武州忍藩・備前岡山藩から多くの武士たちが訪れました。また地域の村人たちは通常の年貢負担だけでなく、警備の人足や船の提供をするなどの負担に応じるようになりました。

### I 鎖国ニツボン

幕府は寛永十六(一六三九)年にポルトガル船の入港を禁止、二年后オランダ商館を長崎の出島に移して、鎖国の形ができあがります。海外情報はオランダ商館長が幕府へ提出した「オランダ風説書」があるものの、機密扱いで市中には出回らせませんでした。

しかし、海に囲まれた日本では漂流してきた異国船との接触もありまし

た。安永九(一七八〇)年には中国船が千倉沖へ漂着したことがあり、そのときの関係資料が房総に残されています。

### II 異国船の渡来

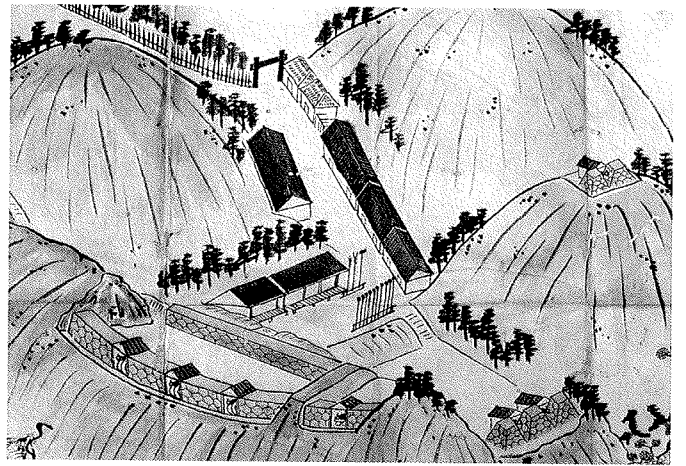
十八世紀の後半になると、ロシアが日本との通商を求めて蝦夷地への南下を繰り返すようになります。幕府も対応を迫られて、東京湾沿岸の巡視を実施し、諸藩に海防を命じ、東京湾の防備や蝦夷地の防備を具体化していくことになりました。十九世紀に入るとイギリス商船が頻繁に来航、中頃にはアメリカ捕鯨船も渡来するようになります。文政元(一八一八)年には東京湾へもイギリス船が姿を現しました。

### III 海防論

ロシアの南下に危機感を持った仙台の工藤平助や林子平が国土防衛策を論じると、海防論議が盛んになります。天明六(一七八六)年に子平が『海国兵談』で海国日本の海防不備について指摘した頃から、日本各地で異国船が出現したのです。異国船の渡来が頻繁になる文政・天保頃からは国防を論じる人々も増え、そうした議論はやがて攘夷論や開国論へと進んでいきま

### IV 東京湾の海岸警備

東京湾で海防対策が取られたのは、老中松平定信による寛政五(一七九三)年の沿岸巡視からです。文化七(一八一〇)年に会津藩と白河藩がそれぞれ、相州側と房総側の警備を命じられる



大房御台場図

と、現地で所領を与えられて陣屋と砲台を設営し警備体制が具体化します。日露関係が改善した文政年間には警備体制が縮小し幕府の管理下になりましたが、アヘン戦争の情報を得た幕府は、再度警備を強化するため、天保年間の末、相州側で川越藩、房総側で忍藩に警備を担当させます。さらに浦賀へアメリカの軍艦が通商を求めてきた翌年の弘化四(一八四七)年には、相州側で彦根藩、房総側で会津藩を追加した分担警備の御固四家体制ができあがり、ペリーの来航を迎えることになりました。

### V ペリー来航

嘉永六(一八五三)年、ペリー率いるアメリカ軍艦が浦賀へ来航し、久里浜へ上陸して開国を求める国書が渡されました。煙を上げる黒い船体や空砲の発射は人々に衝撃を与え、浦賀周辺には見物人も大勢集まりました。翌年に再来航して日米和親条約の締結となりましたが、イギリス・ロシア・オランダとも和親条約が次々と結ばれ鎖国は終りを迎えました。

### VI 分領に暮らす人々

房総の警備を担当した藩の支配下におかれた村々では、新たな負担が増えました。警備役人の通行が増えると人足や馬の徴用に応え、台場建設のために材木を切り出し、異国船の発見があると、陣屋へ通報し、陣屋や砲台へ人足・水夫として出かけ、船や鉄砲を提供しました。警備の陣立は祭のようであつたと語った人もいます。

この特別展では以上の六章に分けて展示を構成し、開国へと大きく動いていく日本の中で、異国の進出にゆれた時代の安房の人々の生活を紹介するとともに、東京湾の入口にあつて首都江戸を防衛する役割を担った館山の特性を考えてみたいと思います。

### 【関連事業】

◆講演会「江戸湾海防と房総」

講師 日本大学国際関係学部 准教授 浅川道夫氏

2月11日(月・祝) 13時30分

### ◆展示解説会

① 2月9日(土) 13時30分

② 3月9日(土) 13時30分

**資料紹介**

『孫真人玉函方』

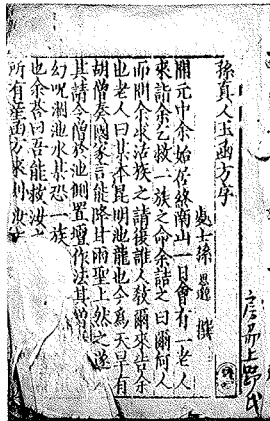
昨年夏、「館山で南宋時代の医学書発見」というニュースが大きく報道されました。北里大学東洋医学総合研究所の小曾戸洋先生の調査により、市内に伝来した医学書が、中国医学史および印刷出版史上の大発見であることが分かったのです。

本書は、中国南宋時代(12〜13世紀)の出版物で、木版印刷で作製されています。内容は、7世紀頃の医師・学者である孫思邈(孫真人)が著した『玉函方』全3巻、および『膏肓腧穴灸法』・『産育宝慶集』の2書が収められています。『玉函方』は、薬の処方を書いた書、『膏肓腧穴灸法』は、南宋の莊綽の編著でツボや灸法を記した書、『産育宝慶集』は、北宋の郭稽中が著した産婦人科の書です。

これらはいずれも稀少な宋版医書(宋の時代に出版された医書)で、未

知の医書が新出することはありえないと考えられていました。さらに、本書には「金沢文庫」の印が押されており、鎌倉時代に北条実時が蔵書を保管するために設立した金沢文庫の所蔵であったことを示しています。

本書が伝来した上野家は、里見氏家臣の家柄で、江戸時代以降は医者の家業としていました。金沢文庫で所蔵されていた医学書が、どのような経緯で上野家に伝わったのかは明らかではありませんが、その背景には、安房と鎌倉との交流や、里見氏との関係などを考えることができそうです。なお、本書は他の医学関係資料と共に当館にご寄贈いただきました。



『孫真人玉函方』

**ピクアツプ八犬伝**

『八犬伝』の見返し

『八犬伝』の表紙や見返し、口絵・挿絵には様々な意匠が凝らされており、本文の内容を暗示するようなものもあります。作者の馬琴は本文だけではなく、画工に対しても口絵や挿絵の下絵を示して詳しく指定しています。読本における口絵や挿絵は単なる添えものではなく、その魅力の重要な一端を担っていました。

同じように、表紙や見返しの絵にも馬琴の意図がかなり反映していると考えられます。たとえば、第五輯の見返しを見てみましょう。右上に鳩、左下に中国風の男性と犬が描かれています。その上には「靈鶴黃耳書信不愆」と書かれています。初輯で義実が滝田城内に山下定包の非を知らせる手紙をばら撒きますが、その時に使ったのが伝書鳩。犬は黄耳・人物は



『八犬伝第五輯見返し』

陸機と云って、晋の都にいた陸機が遠く離れたふるさとの母に手紙を送るため、かわいがっていた犬の黄耳に頼み、無事手紙を届け帰ってきたものの、力尽きて死んでしまうという物語によるものです。

この第五輯には、猪平が信乃に音あての書状を託したり、額藏の処刑決定の通知や道節手配の下知状が読み上げられたりするなど、手紙が随所に登場します。この見返し絵は見事にその内容を、しかも犬を使って表現しているのです。

**むらの行事  
まちの行事**

**ジンガカエ**

館山市洲崎



この写真は、大きな綱を引っ張り合っていますが綱引きをしているわけではありません。実は神社の鳥居にかける大きなしめ縄をつくっているところなのです。

館山市の西端にある洲崎では地域の人たちが大しめ縄をつくり大漁と安全を祈るジンガカエの行事があります。年が明けてすぐの1月8日の朝、洲崎神社に大勢の人が集まり、両手で抱えるほどの大きさのわらを束ね、数人がかりで編んでゆきます。4m以上の大きなしめ縄をつくるのですから、新しいわらの束を足さないとなったく長さが足りません。帽子をかぶったおじさんも手拭いをかぶったおばさんも手に手にわらを持ち、作っている最中のかげのしめ縄へ向かいます。太いしめ縄を押し合いながら編み込み、きれいに整えた後、全員で引っ張り合って縄を引き締めます。さらに細かい部分を整え広場の中央に丸めておき、お神酒をかけます。さらに自宅用の小さなしめ縄を丸めて大きなしめ縄の上にかかげお神酒をかけてもらいます。

縄が出来ると2匹の鰯と「久那戸大神」の木札をつけ、鳥居の前にしめ縄を取り付けて終了です。久那戸大神は悪いものの侵入を防ぐ道の神様。安房地方では、集落の境にツナツリがあり、民家に一年中しめ縄がはられているところもあります。わらで作られた結界で家や集落を守っているのです。



# 博物館の活動 日誌ダイジェスト 平成24年4月～25年1月

## ◆平成24年4月

1日【本館】体験教室「甲冑を着よう」開催（以下、日曜・祝日ごと  
に実施）体験者522名（1  
月29日）

21日【本館】新収蔵資料展「あたら  
しい資料のご紹介」開催（1  
月10日）入館者12789名

## ◆6月

2日【分館】安房学講座第1回開催  
（以下、毎月第1土曜日開催全  
8回）参加者延468名

15日 県民の日協賛無料開館

16日【本館】「甲冑士養成講座」開  
催。参加者3名。

17日【本館】歴史教室「古文書を読  
んでみよう」日曜午前・午後ク  
ラス開催（以下、毎月第3日曜  
開催。全10回の内8回）参加者  
延803名

21日【本館】歴史教室「古文書を読  
んでみよう」火曜クラス開催  
（以下、毎月第3火曜開催。全  
10回の内8回）

24日【本館】ピックアップ八犬伝第  
1回開催（以下、8/26・9/  
23・11/25・1/27・3/24 全  
6回の内5回開催）参加者延  
115名

26日【分館】巡回展 青木繁「海の



ピックアップ八犬伝(8月26日)

幸「オマージュ展開催（9月  
2日）入館者8250名

## ◆7月

7日【本館】収蔵資料展「職人の世  
界」開催（9月2日）入館者  
7898名

14日【分館】巡回展ギャラリート  
ーク（洋画家佐々  
木豊氏。美術評  
論家ワシオ・ト  
シヒコ氏）参加  
者60名

29日【本館】夏休  
み子ども歴史教  
室「館山城跡  
（城山）探検隊」  
参加者10名

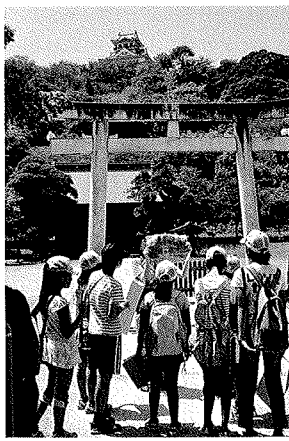
## ◆8月

8日 館山湾花火大  
会のため特別  
開館

29日 博物館実習（  
9月4日）  
↓4名の実習

## 編集後記

分館の愛称が「渚の博物館」になりま  
した。今後よろしくお願ひします。



城山探検隊(7月29日)

◆12月  
25日 大掃除  
◆平成25年1月  
1日 館山城正月臨時開館（3日）

◆10月  
6日 新・地区展「船形」開催（11月  
25日）入館者7481名

28日 歴史教室「わたしの町の歴史  
探訪―船形地区―」参加者5  
0名



ギャラリートーク(7月14日)